

今年度の総括(成果と課題)

1 研究主題・仮説・視点等の設定について

新しい研究の立ち上げに際し、本委員会の目的である確かな学力を育成するための「学習指導の在り方」から、根本的なものは全く変わるものではなく、むしろ前年度までの研究の延長線上にあるものとして共通理解する中で、研究主題・仮説・視点を設定できたことは、大切な第一歩となった。

研究主題が示す基本的な目標は何一つ変わってはいない。ただし、これまで以上に子どもたちが主体的に考え、伝え合う学習活動を展開することを重点課題とするため、主題には「伝え合う」を加え、副題を「言語活動の充実を目指して」とした。これにより、昨年度の課題でもあった「教科の特性に応じた、授業レベルでのより具体的な指導・支援の在り方」は「言語活動を充実させる」をひとつの仮定としておさえ、単元や学習過程を構築する際のひとつの方向づけとなった。

「言語活動の充実」とはどのようなことであるのか、文献等を基に、各教科ごとに分担してレポート発表を行った。その中で、言語活動を充実させることの意義について共通理解を図ることができた。これまでの問題解決的な学習の授業構築において重視してきた「自力解決」「小集団交流」「全体交流」等で活動してきたことと同様の活動であることを確認することができた。

「伝え合う」姿のみを授業の善し悪しにするのではなく、言語活動は「考える」として「説明する」ことが互いに補完し合って理解を深めるのであるから、自力解決時の支援や指導の具体を示していく必要がある。教科特有の言語の習得や活用、ノート作り指導、適切な資料やワークシート等の準備等、具体の幅を広げていく必要がある。

今年度は、少ない集まりの中、研究の初年次として昨年度までの研究を土台としながら、概要及び内容について構築していった。しかし、まだまだ共通理解しなければならないところはある、次年度以降、授業実践を通じた理論構築と共通理解をしていかなければならないところである。例えば目指す子どもの姿の具体について、それぞれ自分の学校の日常実践の成果を話題にしたり、授業公開を通したりする中で、共通理解できるところもあるものとする。発達段階、教科や単元のねらいに応じ、目指す子どもの姿を教師側がしっかりイメージする、また、育てる意識をもつことは、単元構築には欠かせないことだからである。

2 視点 1 について

「言語活動の充実」を意識することは、子どもの学習活動をイメージすることにつながった。子どもの思考や活動に沿って単元構築をすることができた。

言語活動を簡単にとらえると「考え、説明する」活動となり、どの教科、どの単元、どの時間においても充実・継続させていくことは、学習に向かう意識や「知りたい」「伝えたい」につながっていく。このような成果は昨年までの研究と同様であるが、「言語活動」の充実においても同様である。

国語科の学習において、言語活動を通して身につけた力を、他教科の言語活動でどのように活用するかという視点での検討は不十分であったと感じる。国語科と他教科の「言語活動」の関連性について、さらに共通理解していくべきである。例えば国語で「読書発表会」という言語活動を行う中で国語としての力を培い、社会科ではその経験で培った国語の力を生かして調べ学習の発表を行う、という単元構築の仕方も考えられる。つまり、「言語活動」を行うために必要な基礎・基本の習得とその活用は、国語科の中だけで行うのではなく「他教科の学習活動の中で、どのような場面でどのように」という研究の視点も重要であった。

3 視点 2 について

「言語を使って考える」「考えを説明して自分の考えを再構築する」「他の考えを聞いて自分の考えに確信を持つ」「他の考えを聞いて自分の考えを補う」「他の考えを聞いて間違いに気づく」等、言語活動を充実させることが、個々の主体的な学習意欲の高まりにつながっている。また、そのような学習活動を繰り返すことで、結果、知識や技能の定着にもつながっている。知識や技能を一方向的に伝えるだけの学習活動よりも効果的であることは、今年度 5 本の授業公開を通して検証された。

今年度の研究がスタートしてすぐ(授業実践に入る前)に、各教科における言語活動の具体についての理論研修を行う中で、例えば言語活動は学習の目的を遂げるための手立てであること、言語活動の姿そのものが評価規準にはならないこと等、「言語活動」の基本を共通理解することができた。また、言語活動が、自力解決や全体交流での子ども同士の伝え合いということのみで押さえず、思考するためのツールとして充実させる必要があることを共通理解した。

昨年度までの研究の成果に基づき、教科毎の言語活動の在り方について、さらに深化させていく必要がある。